

2018年 学習ガイダンス資料 Contents 一目次ー

☆ 英語	1. グノーブルの考える「英語」	P. 1 ～ P. 4
	2. 受講効果を上げるために	P. 5 ～ P. 6
	3. 大学入試の変化	P. 7
	4. 今後について	P. 8 ～ P. 9
	5. 新入試*への取り組み	P.10 ～ P.13
☆ 数学	1. グノーブルの考える「数学」	P.14
	2. 受講効果を上げるために	P.14 ～ P.16
	3. 大学入試の変化	P.16 ～ P.19
	4. 今後について	P.19 ～ P.20
	5. 新入試*への取り組み	P.20 ～ P.21
☆ 国語	1. グノーブルの考える「国語」	P.22 ～ P.24
	2. 受講効果を上げるために	P.24 ～ P.26
	3. 大学入試の変化	P.26 ～ P.28
	4. 今後について	P.28 ～ P.29
	5. 新入試*への取り組み	P.30 ～ P.32

新入試*：2021年1月（現高1生が受験する年）センター試験が廃止され、大学入試共通テストが始まります。

1. Gnoble の考える「英語」

▼英語を読む

次の文章は、Apple Inc.の創業者の Steve Jobs 氏が、2005年6月にスタンフォード大学の卒業式で述べた祝辞の一節です。

Sometimes life hits you in the head with a brick. Don't lose faith. I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did. You've got to find what you love. And that is as true for your work as it is for your lovers. Your work is going to fill a large part of your life, and the only way to be truly satisfied is to do what you believe is great work. And the only way to do great work is to love what you do. If you haven't found it yet, keep looking, and don't settle. As with all matters of the heart, you'll know when you find it. And, like any great relationship, it just gets better and better as the years roll on. So keep looking. Don't settle.

時として人生ではレンガで頭をかち割られるようなことが起きるものです。(しかし)信念を失ってはいけない。私は確信しています、私を駆り立ててくれたのはただ一つ、自分のしていることが大好きだという気持ちだったと。 皆さんは自分が好きなものを見つけなければいけない。それは仕事でも恋人でも同じように当てはまります。皆さんはこれから仕事^が人生の大きな部分を占めていくでしょうが、自分が本当に心の底から満足を得たいなら進むべき道はただ一つ、自分が素晴らしいと信じる仕事^をすることです。そして素晴らしい仕事^をしたいなら進むべき道はただ一つ、自分のする仕事^が大好きであることです。まだ見つからないなら、探し続けること。落ち着いてしまっ^てはいけません。心^の問題と一緒で、そういうのは見つかるとピンとくるものです。そして素晴らしい人間関係と同じように、年を重ねるにつれてどんどん良くなっていく。だから探し続けること。落ち着いてしまっ^てはいけません。

英語で文章を書いたり、英語で話をするには**英語を発信する力**が必要ですが、それより前に、英語の文章が読め、英語を聞いて分かるという**受信する力**を身に付けねばなりません。受信とは、読んで・聞いて意味が分かるということで、必ずしも和訳することではありません。例えば This is my house. のような文であれば、中1の夏を過ぎる頃にもなればイメージが脳裏に浮かび、和訳しなくても意味は分かるはずですが、しかし内容が抽象的になりイメージしづらくなると、日本語に置き換えた方が分かりやすくなります。冒頭の文章は決して抽象度が高いとはいえませんが、高校生になってからグノーブルの門を叩く方のほとんどがこのレベルの英語が読めないのが実情です。以下のように読むのがグノーブル流で、授業の時にもこのように解説します。例として下線部を取り上げます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) that the only thing 唯一のこと(どんなこと?) that kept me going 私を進ませ続ける was は…だった(何だった?) that I loved 大好きだったということ (何を?) what I did 私のすることが .

和訳問題の答案としてこのまま解答欄には書けませんが、十分に受信できていることはお分かりいただけると思います。また、英語力が高まるにつれて、区切れ目は少なくなっていくます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) that the only thing that kept me going 私を進ませ続ける唯一のことは (どんなこと?) was that I loved what I did 私のすることが大好きだったということ .

要するに「英語を読む」には、以下のようにすれば良いのです。

区切りを見つけて意味を捉え ⇒ 自然に湧いてくる疑問と共に ⇒ 左から右に読んでいく

▼英語を聞く

「読む」際には文末のピリオドに到って「あれ？分からない」と感じたら、文の初めに戻って読み返すことが可能です。しかし、冒頭の一節は『祝辞』として語られたものでした。「英語を聞く」場合には、音は聞こえた後すぐ消えてしまいますから、前に戻ることはできません。英語の語順のまま受信する必要は一層高まります。(ただし、聞く場合には話し手が意味の切れ目で一瞬ポーズを入れますので、意味の切れ目を誤解する可能性は低くなります。もちろん、英語を聴き取る耳が鍛えられていることが前提の話ですが。)

▼文法力と語彙力

さて、ここで問題が2つ生じます。1つは**どうすれば区切りを正しく見つけられるか**ということ、もう1つは**どうすれば区切りの内側の意味が分かるか**ということです。

「区切りを見つけて」と言うのは簡単ですが、英語を読めない人は区切りを正しく見つけられません。例えば先ほどの下線部を

I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did.

のように区切ってしまったらどうでしょうか？正しく受信できる見込みはゼロです。また、convinceの意味を知らなければ、I'm convincedが分かりません。そこで、**文法力と語彙力**が必要になります。

▽文法力=区切りを見つけて区切り同士の関係を把握する力

グノーブルでは、特に中学生の間は**英文法**を重視していますが、それはテストの文法問題に正答するためというよりむしろ、**区切りを見つけて意味のカタマリ同士の関係(=構文)を把握する力**を培うためです。先ほどの下線部は、文法的には、I'm convinced_(SV) に続く that 節が

[^①that the only thing_(S⁻) (^②that kept me going) was_(V⁻) [^③that I loved [^④what I did]] (C⁻)] (O).で

- ①that は接続詞。be convinced の目的語になる [名詞節] を導いている。
- ②that は関係代名詞。先行詞である that 節内の主語_(S⁻)を修飾する (形容詞節) を導いている。
- ③that は接続詞。that 節内の動詞_(V⁻)の補語になる [名詞節] を導いている。
- ④what は関係代名詞。loved の目的語になる [名詞節] を導き、節内で did の目的語になっている。

と説明できますが、英語のネイティブはいちいちこのような分析をしながら読んではいません。それは、私たちが日本語の文法を意識せずに日本語を運用しているのと同じです。

ここで気をつけなければいけないことがあります。それは、**ネイティブは文法を意識していません**だけであって、**文法をしっかりと身に付けている**ということです。日本語のネイティブであれば、『動く』という動詞は五段活用する動詞だから、『ない』に接続するときには未然形の『動か』という活用形を用いるのだなどと分析することなく、『動か**か**ない』は正しいが『動か**く**ない』は間違いだと瞬時に判断できますが、それは、文法が身に付いているからできることなのです。

グノーブルでは**英文法**を身に付けるために、中学生テキストの基本例文(=Sentences for Workout)を全て*GSL化し、*Workoutを通じて運用できるように指導しています。以下の英文は全て Sentences for Workout からの抜粋です>(*GSLと*Workoutについては本資料のp6をご覧ください)

- ①that : We are happy **that** you saw your mother again. 【中1E4 ターム(12月)テキストより】
- ②that : The novel **that** was written by the writer won the prize. 【中2 夏期講習テキストより】
- ③that : My first impression was **that** he was really funny. 【中3 夏期講習テキストより】
- ④what : I don't believe **what** you've just said. 【高1G4 ターム(7月)テキストより】

Workoutによって以上の文法事項をしっかりと身に付けている生徒は、I'm convinced **that** the only thing **that** kept me going was **that** I loved **what** I did.を切れ目を見つけながら、返り読みすることなく、一度で意味を捉えることができます。

(Jobs氏祝辞中の下線部は、難しい語は1つありませんが、正確に意味を捉えるにはしっかりとした文法力が必要です。読み書きに必要な文法力の有無を確認する指標としてお読みいただけます。)

▽語彙力=区切り内の意味を捉える力

グノーブルでは中3から大学入試レベルの長文を読み始めます。文法を習得している生徒でも、英文の中に知らない語がたくさん出てきます。語彙の壁にぶつかるわけです。

未知の語があっても文脈から想像することは可能ですし、そうすることは非常に大切です。しかし一文の中に3つも4つも意味の分からない語があれば、想像するにも限界があります。そこで、相談に来る生徒がいます。「先生、単語がわからないから長文が読めません。市販の単語集を買って覚えようと思うのですが、どの単語集がおススメですか？」我々は答えます。「単語集で英単語と日本語訳を一対一対応で暗記するようなことはしないでください。授業で板書した語彙解説を写した『語彙ノート』を作って頻繁に目を通し、英語の本文を音読して頭に沁みこませてください。辞書を引いたら、必ず語源の説明を読むようにしてください」と。

漢字の意味を「^{へん}偏や^{つくり}旁」から類推できるように、英語の語も、『接頭辞+語根+接尾辞』の組み合わせで意味をイメージすることができます。例として、**dict**という**語根**と**接頭辞**・**接尾辞**の組み合わせを挙げます。【 】内が意味のイメージ、「 」内が訳語です。

- dictate = **dict** 言う +ate…させる ⇒【言いつける;言って書き取らせる】「命令する;書き取らせる」
>dictator = dictate+or…する人 「独裁者;権威者;口述者」
>dictation = dictate+ion 名詞語尾 「指図;指令;書き取り」
diction = **dict** 言う +ion 名詞語尾 ⇒【言うこと;言い方】「言葉づかい;言いまわし」
>dictionary = diction+ary…に関する場所 ⇒【言いまわしが収録されている場所】「辞書」
predict = pre 前もって+**dict** 言う ⇒【前もって言う】「予言する」
>prediction = predict+ion 名詞語尾 「予言」
contradict = contra 反対に+**dict** 言う ⇒【反対を言う】「反論する;矛盾する」
>contradiction = contradict+ion 名詞語尾 「反論;矛盾」
>contradictory = contradict+ory 形容詞語尾(…の性質がある) 「反抗的な;矛盾した」

先の下線部に出てきた convince であれば、グノーブルの授業ではどの講師も、**接頭辞 con** 全く、すっかり+**語根 vince** 征服する ⇒【完全に(精神的に)征服する→思い込ませる】「納得させる、確信させる」のように板書して、同じ**語根**を含む convict, victory, victor, invincible などにも言及します。

高校生にもなると生徒は電子辞書を持ち歩くようになりますが、電子辞書に入っている英和辞典はほとんどが大修館書店の『ジーニアス』です。『ジーニアス英和辞典(第5版)』で convince を引くと見出し語と発音記号のすぐ後に、【原義:完全に(con)征服する(vince)→説得する.[派]→conviction(名)】と説明されています。その兄貴分に当たる『ジーニアス英和大辞典』を引くと、【初 16C;ラテン語 convincere(征服する)より. con(完全に)+vince(征服する). convict と同語源.cf. victory, victor】と、より詳しく解説されています。また、三省堂の『ウィズダム英和辞典』(製本されている辞書を購入すると、無料でウェブ版が利用できます)では

con•vince * /kənˈvɪns/ [音声] [con(完全に)vince(征服する)] ((名)conviction, (形)convinced, 以下省略…

と出ています。英和辞典を引いたらこれらの説明を読むということを、習慣にしたいものです。

単語集で単語を覚えようとする試みは、泳げない人が、泳ぐのに必要な筋肉をウェイトトレーニングをして鍛えようとするようなものです。効果が全くないとまでは言いませんが、それが泳げるようになることには直に結びつきはしません。泳げるようになるには、泳いでみるしかないのです。泳いでいる(=英語を読んでいる)間に、泳ぐのに必要な筋肉(=語彙力)は自然と身に付いてゆきます。

▼GSL : Noble Sound Laboratory=グノーブルの音声による演習

グノーブルの授業では英語の仕組みを理解してもらうことをとても大切にしていますが、英語はコトバですから、理解したことを身に付ける訓練をしなければいけません。そのトレーニング(=ワークアウト)をするために、6学年全てに独自開発の音声教材 GSL を導入しています。中学生は文法テキストの Sentences for Workout という基本例文の音声を、高校生は長文の音声を、MP3 形式でウェブサイトから配信しています。

中学生には、Sentences for Workout の基本例文を何度も聴いて音読し、暗誦できるくらい親しんでくるという宿題を全学年・全クラスで出しています。翌週の授業の最後にその中から3本の英文を放送して書き取らせ、定着度を確認します。これによって英語の音を聴き取る力がついていくだけでなく、理解できたことが身につく、語彙も自然に増えていきます。

高校生には長文の音声を配信し、授業で解説を聞いたのでしっかりと理解できている長文を繰り返し聴き、何度も音読するように指導しています。音読すると返り読みができないので、英文の意味を前からカタマリごとに捉えていくことができるようになります。このやり方でスラスラ音読できる長文を一つ一つ増やしてゆくと、初見の長文でもかなりのスピードで読めるようになります。

▼GCL : Noble Creators' Laboratory=発信型の英作演習&添削

英語の発信力を高めるためには、Workout するなどして英語をインプットするだけでなく、少し背伸びをしてアウトプットしてみることがとても役に立ちます。グノーブルは、英語を書くということを重視し、6学年全てで英作文の添削指導をしています。高3になると、授業自体が『読解』と『英作・文法』に分かれ、『英作・文法』の授業内で毎回添削をし、宿題として書いてきた英作文を提出していただき、それも添削しています。中1～高2でも定期的に添削指導をしています。

2. 受講効果を上げるために

①授業内で

▼中学生の授業の流れ

プリント演習①⇒ 添削②⇒ プリントの解説③⇒ 宿題の解説④⇒ 新単元の導入⑤⇒ お帰り問題⑥

プリント演習①：英作文・和訳・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。

添削②：英作文や和訳などの記述式のプリントを回収し、教室で講師が添削をします。

プリントの解説③：添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、適切な解説をします。

宿題の解説④：前回の授業で課したテキストの文法問題や読解問題を解説します。

新単元の導入⑤：カリキュラムにある文法単元を、黒板を使った双方向の授業で説明します。

お帰り問題⑥：Workout してきた基本例文 (Sentences for Workout) の定着度を確認するため、
Dictation^{書き取り}してもらいます。ちゃんと書き取れた方から授業終了です。

▼高校生の授業の流れ

プリント演習①⇒ 添削②⇒ プリントの解説③⇒ 宿題の解説④⇒ お帰り問題⑤

プリント演習①：英作文・和訳・要約・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。

添削②：英作文・和訳・要約などの記述式のプリントを回収し、教室で講師が添削をします。

プリントの解説③：添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、適切な解説をします。

宿題の解説④：前回の授業で課した文法テキストと読解テキストの問題を解説します。

お帰り問題⑤：高1までは全クラスで Workout してきた読解テキストの定着度を確認するため、
GSL を放送で流し、Dictation^{書き取り}してもらいます。高2以降は、クラスの状態に応じた問題を出しています。

▼休まない・遅れない

英語の授業は中1から高1までは年間に49回です。受講して伸びる生徒は欠席も遅刻もせずに【宿題⇒授業⇒復習】のサイクルを生活に組み入れている方です。授業を休むと、授業中の緊張感を持った演習ができず、演習後の痒いところに手が届く解説を聞けなくなるだけでなく、その前後の【宿題…復習】の学習サイクル全てを失うこととなります。中学生であれば、新単元の導入授業も受けられなくなります。行事等でふだんお通いの曜日で受講できない場合は、振替授業に出席することを強くお勧めします。

②授業外で

▼宿題と復習

英語科では、中1から高3の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなくてはなりません。これをやらずに漫然と授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

宿題をしっかりとやるのは最低限のことで、英語力が伸びるかどうかは **Workout** を継続しておこなうことにかかっています。生徒の皆さんには繰り返し指導していますが、確認のため掲載します。

▽中学生の **Workout** : 小ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、継続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

—— 授業で「理解」したことを「身に付ける」ための **Workout** (=トレーニング) ——

- ① **Listening** : 授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く (回数は全ての文が完全に聴き取れるまで)。電車の中での時間も利用する。
- ② **Retention / Shadowing** : **Retention** は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する練習方法。**Shadowing** は、聞こえた英語をすぐさままねて発声する。
- ③ **Reading aloud** : ②の **Workout** で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき5回。
- ④ **Recitation** : ③の **Workout** の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗誦する。目安は一文につき10回。
- ⑤ **Dictation** : ④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがないかを確認する。

以上の **Workout** が終わったあとで、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているので、スラスラと解けるはずです。

▽高校生の **Workout** : 読解問題に関しては、以下の **Workout** を行ってください。

- ① **Listening** : 授業で理解した **GSL** 対応の長文を題材にする。
 1. 英文を見ながら音声を聞き、意味の切れ目を意識して目で英文を追いかける (慣れるまで)。
 2. 英文は見ずに音声を聞く。聞き取れない箇所は、後で英文を見て確認する。全て聞き取れるまで繰り返す。(英語の耳が出来てきたら聞き取れているかの確認に **Dictation** をするのもよい。)
 3. 英文は見ずに音声を聞いたそばから **Shadowing** する。
(1と2は電車の中などの時間も利用する。3は自宅では大きな声で、電車ではクチパクで。)
- ② **Reading aloud** : 授業で理解した長文を題材にする。気持ちを込めて、声に出して読む。目安は10回。一回毎に右のように印をつけてゆくと励みになります。

音読の効用は、具体的には以下の三点です。

1. 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない (= 右から左へのいわゆる「返り読み」ができない) ので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。= **1回読んだだけで分かる力がつく!**
2. 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。= **速く読める力がつく!**
3. 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているので、文法・語法・語彙が記憶に残りやすくなる。
= **英語力そのものが向上する!**

3. 大学入試の変化

英語は地球人類の共通語になりました。グローバル化とボーダレス化が進むにつれて、英語の重要性は高まるばかりです。このような状況の中で、大学入試でも様々な改革の動きが出てきました。

▼増える資格試験の入試利用

文部科学省は2012年に発表した「大学改革実行プラン」の中で、**大学教育の質的転換、大学入試改革**を掲げ、『**英語による授業の倍増**』、『**入試における資格試験の活用促進**』を表明しました。

上智大学の国際教養学部、早稲田大学の国際教養学部、法政大学のグローバル教養学部など、**英語による授業**だけで卒業できる学部が現在でも複数ありますが、大学での英語による授業が今後はますます増えていくと思われます。

また、AO入試の選考に資格試験を用いたり、一般入試の通常の募集枠とは別に TOEFL*枠・TOEIC**枠・TEAP***枠を設けるなど、英語の資格試験を利用する大学が増えています。

TOEFL* : TOEFL (Test of English as a Foreign Language = 「外国語としての英語のテスト」、トーフル) は、アメリカ合衆国の NPO である Educational Testing Service(ETS)が主催している外国語としての英語のテストです。その名称の通り非英語圏の出身者のみを対象としていて、英語圏の高等教育機関による入学希望者の外国語としての英語力判定のために用いられます。

2005年から導入されている iBT (Internet-Based Testing) では、スコアは0～120で表示されず。読む・聞く・話す・書くの4技能全てが試されます。

TOEIC** : **国際コミュニケーション英語能力テスト** (Test of English for International Communication)、通称 **TOEIC** (トエイック) は、英語を母語としない者を対象とした、英語によるコミュニケーション能力を検定するための試験です。試験の開発、運営、試験結果の評価は、TOEFL と同じく ETS が行っています。Listening & Reading テストは年に10回、全国80都市の会場でテストが実施されます。スコアは10～990で5点刻みに表示されます。これとは別に、Speaking と Writing の力を図るテストも実施されています。

TEAP*** : Test of English for Academic Purposes の略語で、上智大学と日本英語検定協会が共同で開発した、大学で学習・研究する際に必要とされるアカデミックな場面での英語運用力(英語で資料や文献を読む、英語で講義を受ける、英語で意見を述べる、英語で文章を書く)を測定するテストです。総合的な英語力を把握することができるよう読む・聞く・話す・書くの4技能全てが試されます。

▼東大の「^{Global Leadership Program}グローバルリーダー育成プログラム(GLP)」

東京大学は2014年度から「グローバルリーダー育成プログラム」を実施しています。国際社会に強い興味を持ち、将来革新的なリーダーたるべく、高い英語力と意欲を備えた学部生が対象です。

学部1・2年次(GLP I)に、トライリンガル・プログラム*などの指定される科目を受講し、実践的外国語能力の獲得、グローバル教養の涵養、実践力・問題解決能力の育成を目指します。

GLP II が始まる学部3年次に GLP I の課程を修了した学生から、TOEFL iBT(Internet-Based Testing)で100点以上に相当する**高い英語力**を持ち、**2か国語以上の外国語を習得してグローバルに活躍することに強い興味と関心がある学生**を約**100人**選抜して、地球規模の課題に対して学術的で革新的なアプローチで臨み、国際社会の指導的人材に要求されるビジョンや能力を養います。

トライリンガル・プログラム* : **高い英語力**を有すると認められる学生(上位10%程度)を対象に、日本語と英語に加え、もう一つの外国語の運用能力に長けた人材を育成する特別プログラムです。

4. 今後について

①中1

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、第1日：動詞と時制①、第2日：動詞と時制②、第3日：助動詞、第4日：比較の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、文法単元としては全て復習となりますが、毎回、新しい発展的な事項も学習することになります。また、この講習から授業中に読解問題の演習を始めます。

▼冬期講習以降

F1ターム（1月）の3回は「不定詞入門」で、不定詞の副詞用法（目的と原因）と名詞用法を学びます。F2ターム（2月）の3回は「文型入門」で、品詞と文の要素と5文型を学習します。新中2の春期講習で「現在完了」を導入して時制を一通り学び終えた後、G1ターム（4月）より「準動詞」の本格的な学習が始まります。

我々の見るところでは、英文法がしっかり習得できるかどうかの分水嶺となる大きな山が五つ存在します。いわゆる『臨界期（脳の言語回路が固定化する時期）』以降、外国語として英語を学ぶにあたっては、この五つの山の一つずつ、乗り越えて行かねばなりません。

一つ目の山は「be動詞の文と一般動詞の文の区別」で、それぞれについて否定文や疑問文・疑問詞を用いた疑問文に変形できる力を身に付けること。この山は中1の間に越えなければいけません。二つ目の山が「準動詞」の山で、不定詞・動名詞・分詞が、動詞の性質を残しつつも、文中では他の品詞の働きをすることをしっかりと理解した上で、自在に使えるレベルまで習熟することが大切です。この山は、基本事項については中2の間に、応用的な分詞構文などについては中3の間に越えたいものです。三つ目の山は接続詞・関係詞を用いた「複文」の山で、ここまでの山々を越えた人は、続く「仮定法」の山と「これらの組み合わせに習熟する」山は、比較的楽に越えることができます。

グノーブルでは中2の夏前に三つ目の山まで一通り導入が終わりますが、生徒が習得するまで時間がかかります。しっかりと身に付くまで、繰り返し復習していただきます。

②中2

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、『中学英語の完成』と題して、第1日：動詞とその周辺、第2日：不定詞・動名詞、第3日：分詞・関係代名詞、第4日：比較他の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、単元としては全て復習となりますが、豊富な文法の演習だけでなく、読解の演習も合わせて行います。

▼冬期講習以降

F1ターム（1月）の3回は「関係副詞・前置詞」です。高校範囲の関係副詞を学習し、前置詞を体系立てて扱います。F2タームの（2月）3回は「文型 一復習と応用一」です。五文型の復習と、S+V+O+Cの文でCに原形不定詞が来る形まで、全て学習します。また、テキスト（宿題）やプリント（授業内演習）で読解問題も扱います。

③中3

▼冬期講習

αとα1クラスでは、既にセンター試験レベルの読解問題を扱っていますが、この冬期講習は全クラスで『大学受験に向けて高校レベルの読解力入門』と題して、読解に特化した授業を行います。GSLの音声も、長文読解問題の配信となります。グノーブル流の「前から読んでいく」を徹底して行い、大学入試レベルの語彙もたくさん学んでいただきます。

EGGS*のご案内：講習本科では読解しか扱いませんので、特別講座としてこの冬もEGGSを開講します。EGGSは、4日間で英語力の基盤となる英文法を全て学習しようという講座です。365本の基本例文をGSL配信します。

EGGS*: English Grammar Green Session for newcomers 「新入生のための基礎英文法講座」。高校生からグノーブルの通常授業受講を希望する方のために2009年度から開講。これからグノーブルで英語を勉強しようという方を対象とする講座ですので、通常授業で英語を受講されている方は受講の必要はありません。また、Fターム（1月～2月）に、EGGS受講者を対象に、EGGSで学んだことの定着を図り、さらに読解力を養成する6回の講座を開講する予定です。EGGSの授業内のご案内します。

▼冬期講習以降

F1ターム（1月）の3回は「複合関係詞・強調・倒置」、F2ターム（2月）の3回は「(高校範囲の)比較表現」です。これで、高校範囲まで文法事項は全て一通り終えて、春期講習から高校生です。

5. 新入試への取り組み

Gnobleの基本姿勢

新入試（大学入学共通テスト）が開始されることに伴い、英語では民間試験を活用することが公表されました。世間の関心はもっぱら「スピーキング対策をどうするのか」ということに焦点が当たっているようです。これまで大部分の大学入試において置き去りにされてきた「話す」という技能がようやく評価されるようになり、グローバル化に対応できる人材の必要性という点で主に企業から歓迎の声が上がっている一方、実際に可否を下される立場である受験生や保護者の方々、また学校関係者からはその対策方法について不安の声も上がっています。グノーブルでは「人生の夢を叶えていく能力を備える」という意味で、この入試改革のチャンスを前向きにとらえています。自らの考えを自信をもって発信できる能力は、コミュニケーションにおける重要な要素です。しかし同時に、「スピーキング力」を養うことは重要でありつつも、「リーディング」「リスニング」「ライティング」といったその他技能の重要性も見落とすわけにはいきません。グノーブルでは生徒の皆さんに「幅広い技能において知的活力を磨いてほしい」と願っています。ビジネスの世界や医療の現場ですでに活躍されている卒業生の皆さんが、前から語順通りに読む「リーディング力」の必要性をグノレットでも語られています（グノレット 18号 p9, p18）。また電話ではなく英文メールで短時間のうちに要件をやりとりする能力や、正確な報告書作成スキル等、「ライティング」の力も要求されるのが当たり前の時代です。

大学の入試問題にはこれまでも各大学のアドミッションポリシー（入学者の受け入れ方針）が反映されてきました。たとえば東京大学は入学試験の基本方針を、ホームページの中で分かりやすく受験生に伝えていますが、そこに「知識を詰め込むことよりも、持っている知識を関連づけて解を導く能力を重視する」といった内容が書かれています。そしてこの方針はまさにこれまでの東大2次試験の英語で十分に表現されてきました。東京大学がこのような能力を試す試験内容を180度転換して、対面でのコミュニケーションスキルだけに特化した試験方式に大きくモデルチェンジするとは考えにくいですし、従来の方針はグローバルな現代社会においてこそむしろ有用な能力であるはずで、もちろん今後もグノーブルは「来るべき時代を見据えて、変化を恐れず、常に先を行く」気概を持って、生徒の皆さんとともに前進し続けていくつもりです。しかしグノーブルは、単なる気休めに過ぎないような「会話授業」を、形式的におこなうつもりはありません。知的教養が問われる場においても通用する外国語運用能力の素地を、各学年に応じて積み上げていくという方向性を見失わず、「大学入学共通テスト」への対応をおこなっていきます。

理解と実践

グノーブルでは他の予備校や進学塾に先駆けて、開塾当初から音声を利用した英語学習を重視してきました。英語科各講師も折に触れて音声教材であるGSLの活用を生徒の皆さんに説明しています。グノーブルの英語では「聴き取り」「音読」はもはや合言葉のように当たり前のものになっており、卒業生の体験記をまとめた「合格者の声」でも、多くの皆さんが「音声学習」に効果があることを力説してくれています。

ところで外国語学習はしばしば楽器やスポーツの上達にたとえられます。頭の中での理解だけではなく、実際に使いこなせるようになるには繰り返し練習することが必要となるからです。「聴き取り」や「音読」はまさしくその練習を実践するための有効な方法であり、第二言語に対する瞬発力を鍛えるうえで、これほど手軽におこなえるプラクティスは他には見当たりません。とはいえこの実践練習も、何を意味しているのかまるで理解していない状態で、流れてくる音をひたすら聞いて発声しているだけでは、望むような効果は得られません。身体的な実践練習が最大限の効果を発揮するには、正しい原理をもとにした理解の場があることが前提となります。

皆さんは浅田真央選手のような超一流のフィギュアスケーターにもつねにコーチがついてきたことをご存知のことでしょう。浅田選手が5歳でスケートを開始したばかりの頃にも、名古屋

のリンクにいる専属コーチが、基本のスケーティングから始まって、ステップ、スピン、ジャンプ等の指導をしていました。そして浅田選手が世界の頂点に立ってからも、タラソワや佐藤信夫といったコーチが、技術的な指導はもちろんのこと、客観的な目で振付師とともに試合での戦略を立案していました。グノーブルでも、私たち講師は、将来「英語の一流選手」になることを目指す皆さんに、年齢や習熟度に応じて、その努力ができるかぎり成果に結びつくような理解の場を提供することを心がけています。また私たちは、基礎段階において正しく英語の原理をつかんでいることが、その後の上達の度合いを決めていくと考えています。

文法理解の重要性

グノーブルの中1～中3テキストのGSLは、英文法の基本ルールを頭の中に構築することを目標につくられたものです。どのような原理で各単語が並べられ、形が変化し、情報が付加され、一つの文が出来上がっていくのかということ、皆さんの頭の中に積み上げていくために毎回の授業がおこなわれています。仮に授業がまったく存在せずに、GSLの英文と音声だけが手渡され「毎日鍛錬に励んでください」と言われたら子供たちはどうなるでしょうか。ごく一部の英語に習熟した子供を除いて、大多数の子供たちはきっと意味の分からない苦行に嫌気がさしてしまうでしょう。

子供たちは大人以上に知的な発見に興味を持ちます。複雑に思えることでも体系化され、シンプルな原理で説明できることが分かると、大変な好奇心で新たな世界を突き進んでくれます。そしてこのとき、GSLの本領が発揮されるのです。知的に内容理解したものをどれだけ耳でつかまえられるのかを試し、自らも声を出してまねをすることで、どんどん瞬間的に引き出せる英語のルールや表現が増えていきます。耳や口を使ったプラクティス（グノーブルではこれを「ワークアウト」と呼んでいます）は、身体を使って反応する感覚と同種のもので、うまくできるようになるとどんどん楽しさと意欲が増していきます。

なぜ一流を極めているアスリートはあそこまで途方もない努力ができるのでしょうか。どう考えても競技そのものに対する「楽しさ」がなければ長続きはしません。サッカーボールを蹴ることが嫌いなワールドカップ得点王を想像できるでしょうか。そして一流のアスリートたちは、自らの競技において上達する「コツ」をつかんできたからこそ「楽しさ」を感じているのだとも言えます。グノーブルの英語学習は「リアルな授業」でコツをつかみ、「GSL」を使ってワークアウトするという強化パッケージを毎週活用するものです。中学生の年代では、より高度な内容を理解し発信するための基礎体力作りがポイントになります。この取り組みは「民間試験の導入＝4技能入試の始まり」に伴い、グノーブル生の知的体力を支える根幹としてより効果を発揮することでしょう。

新入試への具体的対策

グノーブルでは新入試への直接の対策が必要になるのは、英語の基本を身につけ、複雑で高度な内容の英語に触れていくことになる高校生の年代からと考えています。具体的には以下のような方法で、TEAP、英検、TOEFL、IELTS等の民間試験への対応を検討しています。

- ・録音したスピーキングやプレゼンテーションに対する音声添削。
- ・GSLの一部をTEAP、英検等のリスニングセクションに対応した内容に変更。
- ・GSLにインタビューやディスカッション等の素材を導入。

こうした新たな対策は、グノーブル生の「スピーキング」や「リスニング」技能を確認するためのツールとして大いに役に立つことでしょう。しかし4技能のどれをとっても、英語力を向上させるために最も物を言うのは、日頃の訓練にあります。ある卒業生の保護者の方が「グノレット」の座談会の中で次のようにおっしゃられています。

「グノーブルで唯一気になっていたのはリスニングにネイティブの先生の授業がないことでし

た。ところが一番伸びたのがリスニング。東大の本番でもリスニングにはほとんど間違いがなかった。考えてみれば、ネイティブの先生の授業を1週間に2、3時間受けるよりも、グノーブルで用意されている音声教材を活用した方がはるかに効率が良かったのだと思います」(グノレット18号, p40)

利用の仕方や目的にもよるのですが、「英会話スクールに通ったがあまり意味がなかった」という話はよく耳にします。そもそも1度のレッスンの中でネイティブの先生との会話を通じて身につく語彙や表現では大した量にはなりません。インプットが少なければアウトプットもそれ以下に制限されてしまい、結果として「あまり成果が上がらなかった」ということになってしまいます。

今後、新入試に対応したグノーブルの対策ツールを活用する場合も、インプットを軽視しては知的に学力を向上させることはできません。日本語を自由に話したり聞いたりできる子供たちが、日本の国語教育の中で年齢に応じて「リーディング」をおこなうのも、知的リテラシーを培うという目的があるからです。インプットした情報を適切に引き出す訓練を日頃からおこなう、その訓練手段としてGSLを活用し、なおかつ内容を理解した英文の音読に励む、そのうえで英語で20秒でも30秒でも何かを話し録音することで、自分のレベルを把握し、その後の練習方法の調整に役立てていく、というサイクルを継続することが着実に「スピーキング力」を伸ばしていくことにつながります。

大学入学共通テストの先にあるもの

グノーブルでは受験学年になると(正確にはセンター試験の1年前に当たる高2の冬期講習から)、リーディングの授業の冒頭で必ず「要約演習」をおこないます。これには東京大学の入試で、要約問題が毎年出題されているからという理由もあるのですが、そのことよりも「要約という作業が、知的コミュニケーションの力を鍛えるから」という理由によるところが大きいのです。相手(=筆者)の主張を正しく理解し、それを正確に、独りよがりにならずに、第三者に伝えるという力は、あらゆる面での知的活動の土台となります。また「要約演習」で生徒の皆さんが理解した英文は、毎回のGSLとして音声教材化されています。授業を通じて筆者の意図を理解することで、筆者の気持ちそのままになって、正しい発音とリズムをまねしながら音読の練習に励むことができます。

またそのようにして身につけた表現や段落構成についての視点は、ライティングの授業で毎回提出する自由英作文に活かすこともできます。自由英作文では自らが発信者となり、受信者として文章を読んでいるときには気づかなかった英語の特徴を意識することになります。たとえば、結論を最後に述べる日本語に対して、英語では冒頭で大事なことを述べて、それを以下の文章で補足するという展開が基本となります。また文章がうまく読めないのは読み手の力不足であるという「読み手責任」の日本語に対して、「書き手責任」の英語では、どんな読み手にも理解できるように書き手が十分に説明を尽くす必要があります。

このように日本語とは正反対の頭の使い方をする英語的表現は、自らが発信者となるライティングの練習を積むことで身につくものです。当然、そのスキルは話者として発信する場面でも十分に活かされますし、また発信者としての視点がリーディングの理解をいっそう深めるという相乗効果も期待できます。

さらにライティングの授業では、リスニング演習をおこなっています。これまで読んだことのない文章を題材として、聞き手としてのスキル(単語やフレーズを聞き取れるか、話される内容を話されるスピードで前から理解できるか、その文章を読むだけの語彙力、文法力、教養があるか、など)を把握し、弱点を日々のワークアウトの重点課題とすることができます。このようにグノーブルの教材や授業スタイルは、すでに十分に新入試の「リーディング」「ライティング」「リスニング」の対策につながるものとなっています。

しかし実際には、「4技能は大切なことだが、高校の授業が外部テストの対策授業になってはいけない」という、外部試験の導入を危惧する声もあります。確かにこれは一理ある話で、グノ

ーブルでも、得点を稼ぐテクニックに走った結果、英語学習によって得られるはずの面白さを伝えられないという状況は避けたいと強く考えています。

グノーブルの英語には文系コース、理系コース、国公立コース、難関私大コース、医学部コース等の志望別クラスは存在しません。幅広く社会を見渡せる能力が、英語学習にも必要だと考えているからです。実際にこれまでの卒業生たちも、小手先の対策ではなく、英語力そのものを鍛えることに力を注ぎ、結果を出してきました。グノーブル生の皆さんが、母語に加えて英語においても知の力を活かしていけるように、今後とも取り組んでいきたいと思ひます。

1. Gnoble の考える「数学」

物事を論理的に考えられ、自分の力で問題を分析し、解決する能力を身につけてもらう

私たちは、常にこのことを考え授業に臨んでいます。

生徒のみなさんに第一志望の大学に合格できる力をつけていただくことはもちろんのこと、大学生、社会人になってからも役に立つものの考え方、見方を身につけていただきたいと思いますからです。

そのために必要な力とは、「基礎力」「表現力」「実践力」の3つです。

① 基礎力：数学における基礎知識について正しく理解し、計算できる力

問題を解く上で必要となる知識（計算法則、定理、公式）を、ただ丸暗記するだけではなく、「どうしてその計算法則や定理、公式が成り立つのか」の証明や類題演習を通して、しっかり考えることで、「使える知識」として吸収していただくことが大切です。

グノーブルのテキストは単元別に細かく分冊されており、授業を受け復習することで、単元ひとつひとつの知識を確実に定着させることができるように作られています。

さらに、重要単元は繰り返し学習できるようにカリキュラムが組まれています。

② 表現力：自分の考えを正しく表現できる力

実際の入試で得点するためには、自分の考えをしっかりと採点者に伝える力、つまり表現力が必要です。この表現力を養うためには、答案を第三者にしっかりと添削してもらうことが不可欠です。

グノーブルでは、宿題ノートに自分の考えを表現してもらうことや、授業中の発言や発表、授業中に行う個別添削を通して、早い時期から表現力を養う練習をしていきます。

③ 実践力：問題を解く上で必要な知識を選択でき、それを組み合わせることができる力

各クラスの「基礎力」「表現力」を見ながら、担当者がクラスのレベルを判断し、最適な問題を選択して出題した応用問題をこなしていただくことで、実践力を養っていきます。

ここで大切なのが「あきらめず、自分の力で何とかしようという姿勢」です。内容的には難しい問題が多いと思いますが、問題が解けたときは自信がつかますし、たとえ問題が解けなかったとしても、いろいろ考えて解説を聴くのと、投げ出してただ解説を聞くのとでは数学力において雲泥の差が生まれます。

以上の力を養い定着させる為に、なるべく毎日数学にふれるようにしてください。

2. 受講効果を上げるために

①授業内で

グノーブルでは、より効果的に数学の力をつけていただくために、基本的には以下のような流れで授業を行っています。(中1、中2生は担当2人制により、以下の順がクラスによって異なります)

宿題の解説及び前回までの授業内容の復習 → **新単元の導入** → **復習** → **確認**

▼宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

クラスや学年によって量は異なりますが、必ず毎回の授業で宿題を出すことにしています（ただし講習前の最終授業や講習中は除く）。宿題の目的は、授業で扱った基本事項が理解できているかの確認と、基本事項を踏まえての応用問題にじっくりと取り組んでいただくことです。解説が必要と思われる内容については、次回授業の導入時に解説を行います。授業の導入として、宿題の解説や前回授業までの復習をすることによって、授業内容をよりしっかりと定着させることが出来ます。また、頭の準備運動的な意味合いもあります。

▼新単元の導入→演習→確認

新しい内容の解説をし、併せて演習を行います。演習を行うことで、解説した内容が正しく生徒に伝わっているか、また問題を解くにあたってその知識を正しく利用できているかを確認し、分かったつもりではなく、「真の理解」を目指します。また、演習中に教室を回り、答案を確認することによって、個々の理解度を直接確認し、その理解度によって、その日の重要事項をしっかりと確認できる時間を設けています。

▼「ノートをとる」ということ

授業中にノートをとる際に重要なのは、きれいに書くことではなく、「解説された内容を後で自分が見て分かるように書く」ということです。ただ板書をまる写しするだけではなく、難しいと感じたところは、口頭で解説された内容をより詳しく記入しておくなどの工夫が必要です。

②授業外で

▼宿題

宿題も授業の一環ではありますが、ご自宅で勉強していただくということで授業外とさせていただきます。中2までは宿題を提出していただき、チェック及び添削を行っています。宿題をチェックした結果、そのクラスに足りないものが自ずと見えてきます。足りないと思われる部分については、再度授業で時間をとりますので、生徒の皆さんは不足している箇所の復習や確認をすることができるのです。また、生徒自身も宿題をやることによって、自分に足りない部分を意識した状態で授業を受けることができ、より迅速に弱点を克服できるようになります。宿題をやる上で大切なのが、分からない問題にも時間をかけて取り組むということです。分からない問題にあたった時は、授業中にとったノートを参照するなどして、時間の許す限り、じっくりと問題に向き合ってください。しっかりと考えた上で解説を聞くことが重要なのです。実はテストの時、点数に差がつきやすいのが、難問よりも基本～標準的な問題での失点であり、その問題をしっかりと得点源にできるかどうかは、宿題をきちんとやるかやらないかで大きな差がでるのです。

例えば、中学3年生のαクラスでは、必ず毎回10題程度の大学入試問題を宿題として出しています。すると、1年間で約300題の大学入試問題を解くこととなりますので、1回1回の宿題を軽く考えていると、結果として大きな差が生じてしまうことになるのです。

▼きちんと「出席する」ということ

学年が進むにつれて、一度の授業で扱う情報量も飛躍的に増えていきます。一度の欠席が及ぼす影響も、それだけ大きくなります。まずは、安易に授業を休まないようにしましょう。学校行事や体調不良などでやむを得ず欠席してしまう場合は、なるべく早い段階で担当講師に相談してください。

▼毎日数学にふれる

部活や学校行事等で忙しい日々を送っていることと思いますが、毎日「数学にふれる」ことを心がけましょう。学校の宿題でも構いません。大切なのは数の感覚、図形の感覚を損なわないことです。過去にとても優秀な生徒が、短期留学で約1ヶ月間数学から遠ざかっており、帰国後、授業に合流したところ今までしたことがないような計算ミスや間違いを多発したことがあります（もちろん、その後今まで通りしっかり勉強していただきましたので約1ヶ月でもとの状態に戻りました）。ですからグノーブルの宿題や授業内容の復習も一気に行うのではなく、数日に分けて行うのが効果的です。

3. 大学入試で求められる力

大学入試の数学では、提示された条件から結論を論理的に導くことが要求されます。つまり、問題文より全条件と目標を把握し、条件や目標に応じた適切な言い換えを選択・実行し、計算などを正確に遂行することが要求されます。さらに、場合によっては、そのすべての過程を記述することも要求されます。

科目の性質上、ある程度の数学的な常識があるならば、問題に対する解説を聞いたり読んだりすれば、解答に至る過程を理解することはできるとは思いますが、実際は、このすべてを自分だけでやりきる力が必要となります。

（東京大学の「アドミッションポリシー」に続く「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」の中で数学について、以下のように明言されています。《様々な問題を数学で扱うには、問題の本質を数学的な考え方で把握・整理し、それらを数学の概念を用いて定式化する力が必要となります。このような「数学的に問題を捉える能力」は、単に定理・公式について多くの知識を持っていることや、それを用いて問題を解く技法に習熟していることとは違います。そこで求められている力は、目の前の問題からみかけ上の枝葉を取り払って数理としての本質を抽出する力、すなわち数学的な読解力です。》《数学的に問題を解くことは、単に数式を用い、計算をして解答にたどり着くことではありません。どのような考え方に沿って問題を解決したかを、数学的に正しい表現を用いて論理的に説明することなのです。》）

そのために必要な力について、「正しく計算する力」「目標をふまえて行動する力」「論述する力」に分割して、それぞれの力について、また「それらの力を身につけるために」として、受験学年の演習授業で行っていることや、力のつく数学への取り組み方について、具体例とともに説明します。

① 正確な計算をする力

まずは、数式を正しく扱うことができなければなりません。

①-1 ルールを知る

基本レベルの問題で躓く方に多い状況として、高校数学独特の記号を正しく扱えていないことが挙げられます。数学は暗記科目でないと思いますが、最低限のルール（高校数学独特の記号の意味やその性質、導入された背景など）は覚えなければなりません。算数や中学数学では、具体的な量を扱うことが多いのですが、高校数学では、抽象的な量も扱うので、新しい関数や数多くの記号、概念が導入されます。最低限のルールすら定着していない状況では、問題を解くためのスタートラインに立てません。ですので、まずはルールを受け入れることが大切です。さらには、ルールを理解し、正確に運用できるようにならなければなりません。

①-2 計算ミスを防ぐ

数学が得意な方でも、計算ミスはします。しかし、数学が得意な方は計算ミスが少ないのは事実です。計算ミスが少ない方の特徴としては、2点挙げられます。

1点目は「計算ミスをしたときに自分で気付けるプロセスをもっていること」です。計算ミスの少ない方は、自分の計算について、多角的に検証します。例えば、不定積分を求めたら微分して元の式に戻るか確認する。漸化式より一般項を求めたのなら、具体的な値を代入して、与えられた漸化式より実際に求めた値と等しいか確認する。図形の問題であれば、求めた数値に量的な妥当性があるか確認する。など、枚挙に暇がありません。つまり、一方的に計算を推し進めるだけではなく、ところどころで後ろを振り返ることで、進んでいる道が正しいかを検証しているのです。

2点目は、「計算ミスをしそうな計算に持ち込まないこと」です。計算をする際、どんなに大変な道のりでも、正しいことを続ければ、正しい数値を求めることができます。しかし、計算が得意な方は、その愚直な計算では計算ミスの可能性が高まること、時間がかかることが身に染みて分かっているので、工夫ができるときは工夫をします。例えば、公式化された変形法や適切な言い換えを使用できる状況ではそれを用いますし、解法全体における役割をふまえて数式を変形します。つまり、知恵を使うことでミスの可能性を減らそうとします。

② 目標をふまえて行動する力

数学の問題を解く上でのすべての行動（言い換えをする、計算するなど）は、目標があった上で、それをふまえて決定されます。その目標は問題文に書かれていますので、その問題文から条件や目標を読み取らなければなりません。その上で、目標をふまえて、与えられた条件に適した手法を選択し、実行することになります。つまり、数学の問題を解くということは、大局観を持って個々の行動を粛々と実行することと言っても過言ではありません。

②-1 題意を把握する

数学が苦手な方に多い状況として、問題の意味や目標が全く理解できていないことが挙げられます。そのような方は、問題文に登場する数式や言葉尻にのみ注目して、自分の解いた経験がある問題へと都合よく解釈し、深く考えないまま、自分の経験したことのある手法を実行します。その結果、答案には、目標が理解できている人から見ればトンチンカンな内容が羅列されているのです。

数学は、条件反射で解く教科ではありません。頼りになるのは問題文だけですので、問題文を正確に読解して、すべての条件と目標を正確に把握することが、数学の問題を解く上でのスタートラインとなります。このとき、用語や記号の意味や文字の役割などを正しく認識できていないと、問題文の把握はできません。とくに、「場合の数・確率」は、目に見える数式や図形を扱う分野とは大きく異なり、状態の変化を想定する分野ですので、正しい読解をすることが他分野以上に必要となります。

②-2 適切な言い換えを選択・実行する

記憶力のすぐれた方に多い状況として、解いた経験のない問題に対応できないことが挙げられます。このような方は、パッケージングされた解法を、丸々暗記できます。ですから、条件の数値が異なるだけの解いた経験のある問題であれば、模倣することで、正しい結論を求めることができます。しかし、肝心の「その解法を選択する理由」を理解できていないので、本質的には同じ問題に対してすら、出題のされ方が異なると対応できなくなります。さらには、解けない問題に出会ったとき、記憶力があるがゆえに、よくわからないけど、その解法を記憶しようとし、その結果、いくら勉強しても数学が得意にはならず、再び暗記に精を出すという悪循環を繰

り返します。

グノーブル数学科では、多くの数学の問題は必然の発想で解けるというスタンスで授業しています。そのアルゴリズム（問題を解くための処理手順）を一人ひとりが、自分のものにすることで、適切な言い換えを選択できるようになり、解いたことのない問題に対しても、自力で解けるようになります。

③ 論述する力

大学入試の数学の解答形式は、大別すると「マークシート形式」（センター試験や一部の私大など）と「記述形式」（国公立大の二次試験など）の二種類になります。「記述形式」の答案では、解答の数値や結論に至る過程を、採点官に向けて、数式や日本語で記述する必要があります。この記述で求められることは、隙のない論理を積み重ねて、結論を導くことです。例えば、ある言い換えを用いるのであれば、その前提条件を満たしていることを確認した記述があるべきですし、また、具体例を通じて予想したのであれば、その予想が一般に成立することを論証する必要があります。計算の途中式や事実を羅列したところで、肝心な部分に対して曖昧な表現を用いて誤魔化したり、記述がなされていなければ、不十分です。極論的にはなりますが、仮に、正しい数値や結論が求まったとしても、根拠が十分でなければ、その問題が解けたということにはならず、部分点すら発生しません。

④ それらの力を身につけるために

解いたことのない問題を自力で解けるようになるためには、条件や目標に応じた適切な言い換えを自分だけの力で選択・実行する力が必要です。つまり、適切な数学の「道具」を自分で選択し、それを正確に使用できるようにならなければなりません。ここでの数学の「道具」とは、単なる定理や公式にとどまらず、問題を解くための言い換え方や変形法などのことです（以下でも、便宜上「道具」と呼びます。）。

単元別に数学Ⅰ・数学A・数学Ⅱ・数学B（理系の方はさらに数学Ⅲ）の全てのルールを導入が終了した段階になって、高校数学全体を俯瞰できるようになります。受験学年の演習授業では、単元別に導入された「道具」の整理をしていきます。まずは、持っている道具の質を上げ、不足している道具を補います。質を上げるとは、各道具の効果的な相手・効果的でない相手と、使用法やその使用上の注意点を熟知することです。また、不足している道具を補うとは、セットで持つことで効果的な道具の一部が欠けていたときに、その欠けていた道具を手に入れることです。また、上級者へは、必要に応じて、使用するには一定以上のスキルが必要だが、持っていると効果的な道具を伝えることもあります。闇雲に増やすわけではありません。増えてきた道具を整理するために、道具箱が必要です。道具を整理するとは、各道具の関連性や類似点を考え、上位概念としてまとめることです。例えば、「幾何」も「ベクトル」も「座標」も結局は、図形問題を解析するための道具と言えます。ですので、これらの「幾何」「ベクトル」「座標」は、「図形」というカテゴリーの中に入れることになります。このように、上位概念をまとめていきながら、階層的な構造でとらえていくことができます。そうすることで、分野別に最上位の戦略があり、個々の道具が大カテゴリー、中カテゴリー、小カテゴリーと並ぶことになります。この系統立ったものが道具箱であり、先ほどの道具を、この中に整理しながら保管します。この道具の整理ができれば、数学の問題を解くという行為が、この道具箱の中から、目標に応じて必要な道具を取り出し、その道具を用いているだけと感ずることが出来ます。つまり、数学の問題を解くアルゴリズムを持つことで、戦略的に問題が解けることが実感でき、解いたことのない問題にも自力で対応できるようになります。

論述する力をつけるには、本人が作成した答案を第三者が添削するというサイクルが必須で

す。受験学年の夏以降の授業は、毎回は本番に向けたテスト演習です。このとき、「記述形式」の答案を作成し、担当講師が添削することを繰り返します。担当講師が添削しますので、クラス全体の弱点が把握でき、その弱点をふまえた解説をします。また、一人ひとりの生徒の傾向に踏み込んだアドバイスも答案に残します。

結論やその数値だけに注目して、正解した・正解しないに一喜一憂していても「目標をふまえて行動する力」「正しく計算する力」「論述する力」はつきません。

正解しなかった問題に対しては、正しい解法を知るだけでなく、解けなかった原因を追究するべきです。

解けなかった原因としては、

- ・問題文の把握が不十分（条件の未使用。目標の認識不足・誤認。読解力不足。…）
- ・適切な言い換えが不完全（言い換えの無知。言い換えの選択肢不足。言い換えを不正確に実行。想定力不足。…）
- ・計算が不正確（単純な計算ミス。数学独特の記号の使用ミス。計算や言い換えの工夫不足。…）などが挙げられます。

解けなかった原因に応じて、対策するべきことは異なります。例えば、ルール（高校数学独特の記号の意味やその性質、導入された背景など）を知らないために解けないのであれば、早急にルールを定着させるべきです。アルゴリズムに不備があったために解けなかったのであれば、その不備を修正することで、同じ間違いを繰り返さなくなります。正解した問題に対しては、戦略的に解けたかどうか（その言い換えを選択した理由を理解していないと汎用性はありません。）、解法が最適かどうか（入試は、制限時間があるので、効率の良い解法のほうが好ましいです。別解があるならそれも知るべきです。）、論理的な不備がないか（根拠を論理的に示していないのならば不正解です。）を学ぶべきです。今までとは異なる視野で、数学を捉えることができることで、無味乾燥な作業に意味が感じられ、主体的に数学に取り組むことの楽しさを感じられると確信しています。

4. 今後について

①中1

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、第1日：場合の数の基本、第2日：確率の基本、第3日：式の展開の基本、第4日：因数分解の基本、の順に授業を行います。この冬期講習より二次式の数学がスタートします。4日間すべて新単元となり、新しい概念の導入および演習を行います。確実に自分のものとするためにも1、2日目と3、4日目の順序を崩さないように受講してください。

また、現在数学を受講されていない方も、文字式の計算ができれば受講することが可能です。科目追加を考えている方は絶好の機会となります。積極的なご参加をお待ちしています。

▼冬期講習以降

1月～2月（Fターム）では、「式の展開の応用」と「因数分解の応用」を中心に学習していきます。考え方をよく理解し、その上で十分な練習が必要な単元です。中学数学にとどまらず高校の内容にも一部踏み込みます。しっかり学習する習慣をつけてください。

中2の春期講習では平方根（ $\sqrt{\quad}$ ）を学習します。ここから10月までかけて中学範囲の主要単元を終わらせます。今まで以上に日々の学習が大切になってきます。確認テスト等を行いながら、確実な定着を目指します。

②中2

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、高校数学の整式に関する問題を扱います。第1日：整式の割り算、第2日：剰余の定理・因数定理、第3日：余りに関する問題、第4日：複素数と方程式の順に授業を行います。数学Ⅱの内容が中心ですが、新しい内容の導入授業となり決して難しい内容ではありません。必要な知識としては二次方程式までの代数計算、3乗の乗法公式です。

また、新しく数学を受講される方のために特別講座として数学Ⅰの「二次関数基礎講座」を用意いたします。1月～2月（Fターム）は、この内容の続きを学習しますので、この機会に数Ⅰの最重要テーマである二次関数をしっかり身につけてください。

▼冬期講習以降

1月～2月（Fターム）は、Eタームより学習を開始しました二次関数（数Ⅰ）の続きを学習していきます（上記の特別講座の続きの内容です）。二次関数と二次方程式の関係や絶対値のついたグラフなど少し踏み込んだ内容が中心です。ここで学習する内容が、今後いろいろな関数を学習していく土台となります。一つ一つの内容をきちんと吸収することを心がけてください。

③中3

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、第1日：二次関数演習、第2日：三角比演習、第3日：図形と方程式演習①、第4日：図形と方程式演習②の順に演習授業を行います。

数学ⅠAからは、重要度が高い「二次関数」と「三角比」の最終確認を行います。

また、11月、12月と学習してきました「図形と方程式」（数Ⅱ）の演習では、知識がしっかり定着しているかの確認およびその知識を必要に応じて運用することができるか演習を通して確認します。

「図形と方程式」が未習または現在学習中の方は、【数学特別講座】「図形と方程式」をお勧めいたします。4日間かけて図形と方程式の基本事項①点と直線、②円の方程式、③軌跡、④領域について導入授業を行います。Fタームより数学を受講をお考えの方は、ぜひこの機会に特別講座をご受講ください。

▼冬期講習以降

1月～2月（Fターム）の授業は、「三角関数」（数Ⅱ）の単元を学習します。単位円を用いた \sin , \cos , \tan の定義から学習を始め、最重要テーマの加法定理を時間をかけて学習します。

そして加法定理をもとに様々な公式等（倍角、半角の公式、三角関数の合成）を自力で導けるようになっていただきます。

5. 新入試への取り組み

① 現行のセンター試験からの変更点

新しい「大学入学共通テスト」では、数学については下記のような変更があります。

形式については、現行のマークシートのみから一部記述式（数学Ⅰの範囲から3題程度）が導入されることになりました。また、記述式を導入することによって従来の試験よりも時間がかかりますので「数学Ⅰ」および「数学Ⅰ・数学A」の試験時間が60分から70分程度に変更となる予定です。「数学Ⅱ・数学B」に関しては変更はありません。内容面においては、これまでのセンター試験では問題解決における

構想から結論に至るプロセスがあらかじめ提示され、そのプロセスに沿って必要な数値を求めていくといった、問題を解決する過程を再現する力(知識や技能)を求められていました。大学入学共通テストでは記述式を導入することで「問題を解決するための構想を立て、問題解決の方略を表現する力(習得した知識・技能を用いた問題解決能力や表現力)」を重視する内容に、また日常生活や社会の事象等を題材に取り入れることで「様々な問題を数学的に捉える力(習得した知識・技能の運用力や判断力)」を試すテスト内容に変更されます。設問の流れに沿って問題を解いていく従来のセンター試験と比較すると、答えまでの筋道を自力で考える部分や日常生活や社会事象を題材とした見慣れない問題が出題されることもあり、総合的に見ても難易度は上がると考えられます。変更点ばかりが大きく取り上げられていますが、「大学入試共通テスト」に変わっても数学力の根幹である、「正確で速い計算力」、「必要な知識の習得」、「習得した知識の活用」といった基礎学力の必要性は変わりません。

② G noble での取り組み

先述の通り、大学入試共通テストで数学に記述式が導入されることとなりましたが、グノーブルでの指導方針や授業形態が変わることはありません。もともとグノーブルの授業は表現力(自分の考えを正しく相手に伝える力)を身につけていただくことを一つの基本方針としており、中学1年生の早い段階から自分の考えを表現する練習・指導を継続的に行っています。さらに高校3年生の夏期講習以降はテストゼミを毎週行い、しっかりとした表現力の指導に努めています。発表された記述問題のモデル例を見ても本格的な数学力や記述力を問う問題ではなく、従来穴埋めとなっていた場合分け等を受験生自らに課すといった軽めの記述問題です。本格的な論証、証明問題は各大学の個別試験に任せ当面は出題しないということですから改めて対策をこうじる必要はありません。従って授業内容、指導方針の変更は行いませんが、今まで以上に宿題添削、授業内添削、テストゼミ等の添削指導に力を注いでいきたいと考えています。また、共通テストでは、日常生活や社会事象を数学の題材に取り入れる事を明言しています。今回発表されたモデル例は、「公園にある銅像の写真を撮る時に、この銅像を見込む角が最も大きくなる場所を考える」という問題でした。あまり見かけない設定なので一瞬驚きますが、与えられた文章を適切な数学の問題に言い換えることができれば難しい問題ではありません。(最大角を考える問題ですから円を考える事ができれば解決いたします。中学2年生のテキストに類題が載っています)。

グノーブルでは、ある程度知識が揃ったところで適切な言い換えを選択・実行する練習・指導を行っています(*セルフチェックシート)。

これからもグノーブルでは、授業内での生徒とのやり取りや厳選された良問の演習・宿題を通して楽しみながら計算力の向上や必要知識の習得を確実に行っていきますので、多少の変化ではびくともしない「骨太の学力」を授業および添削を通して一人一人しっかり身につけていただけます。

数学は、論理や数式を用いた世界共通語であり、日常生活や大学で学習していく上で必要不可欠な学問の基礎となります。

大学入試制度の変革や社会情勢の変化に柔軟に対応できる能力は、しっかりとした学力の土台が前提となって培われるものです。そして学力の土台をしっかりと築き上げるためには、日々の練習、努力が不可欠です。生徒が目を見せながら主体的に参加できる授業、日々楽しみながら練習、努力できる教材を、これからも提供して参ります。

*セルフチェックシート

高2以降の授業で課された問題に対し、なぜこの解法を選んだのか、どうして解けなかったのか、自分の思考の過程を言語化して書いていくグノーブル数学科オリジナルのシート。言語化することで自分の課題が明確化され、その課題を克服していくことで数学を俯瞰的に捉えることができるようになる。

1. Gnoble の考える「国語」

▼国語という科目の特徴を理解する

国語という教科は、一言で「国語」と括りづらい科目です。特徴から以下の2種類に分けるべきだと考えています。

①鑑賞の国語

「味わう国語」「感性を磨く国語」とも表現できるでしょう。実際に文章を読み、その奥に秘められたもの、すなわち行間をとらえ、深い魅力を味わう力を養うような国語です。

ただ、この力を養うことは教養の範疇に入り、大学受験で直接問われません。逆に「行間を深読みする読み方が文章の読み方なのだ」と勘違いしてしまい、得点力が安定しない状態に向かってしまう恐れもあります。子供の頃本を読むのが大好きで活字に親しんでいた、あるいは中学受験の物語文が得意だったにもかかわらず、中学・高校で、特に大学受験において得点が取れない方は、国語について、ここでいう「鑑賞の国語」を国語の全てと考えてしまい、次にあげる②をあまり意識できない場合があるのではないかというのがグノーブル国語科としての意見です。

ただ、特に一貫校に通っている方にとって、中学時代は「鑑賞の国語」に親しむことも大切だと思います。大学受験には直結しないのですが、国語という科目に親しみ、言語による表現を豊かにし、ひいては精神生活を豊かにするためにも「鑑賞の国語」は重要なものではあると思います。

②情報処理の国語

いわゆる「受験国語」と表現できます。国語の読解問題において、課題文の前に必ず「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」というような表現が、書かれています。これは、「本文に書いてあることだけを根拠にして問題にあたりなさい」、あるいは「本文に根拠を見いだせない問いは決して出しません」というメッセージであると理解すればよいと思います（次の項目でもう一度整理して説明します）。ここで注意すべきことは書かれていないのに「きっとこういうことだろう」「確かこのようなことが書いてあったはずだ」と曖昧に想像力を広げて設問にあたってはならないということです。受験問題を解く上で必要なのは「書かれてあることのみを手がかりにして、聞かれていることのみで答える」ことです。正確な情報処理能力が求められているのです。そうなると上記①の鑑賞の力が十分に備わっている方にとって、実は受験問題において求められていることは「浅い」内容にとどまっていると気づき、物足りなく思えるかもしれません。しかし、そもそも言語とは、書いてあることを正確に読み、それを手がかりに情報処理をするという一面がなければなりません。

書かれた文章は筆者の考えの全てが語り尽くされていないとしても、情報処理、すなわち問題を解くときは、書かれている内容を情報の全てと考えておきたいものです。まず、「相手（作問者）が求めているものを、求められているだけ提供する」という、情報処理に徹した答え方が大切なのだということを意識しましょう。

以下、大学受験に関係する「情報処理の国語」について述べます。

▼「情報処理の国語」を学ぶ上で意識したいこと

さて、では改めて実際にどう学べば良いか、考えてみます。

前の項目にも挙げた内容で、また、過去誰もが見たことのある表現でしょうが、

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」

国語の読解問題冒頭に必ず書かれている内容です。実は、国語の学習に必要なことの全てがここに示されていると思います。表現の前半と後半に分けてその意味を考えてみたいと思います。

「次の文章を読み」

つまり、正確な「文章理解力」です。

決して「次の文章を読まないで」と書かれることはありません（当然です）。よって、文章内容を正確に理解することが前提となります。

この部分でつまづいてしまう原因（つまり何をしなければならないのか）は、

- ①語彙力の不足
- ②物事についての常識・背景を理解が蓄積されていない
- ③文法が定着していない（古典分野のみ）

です。以上の3点について力をつけねばなりません。①と②は実感がわきづらい項目ですが一つ一つ積み上げましょう。①の充実のために必要なのはやはり質の高い活字（言語）に触れる量ということになります。②も非常に重要です。「論点の把握」とも表現できますが、評論系の文章を読むときに、論点を知っていること、つまり、現代社会でどのようなことについてどのような意見があるのかは理解を積み重ねておきたいものです。受験における評論文は時事的な内容を踏まえた文章も目立ちます。日々のニュース等に興味を持つという考えも必要です。③について重要なのはコツコツと「やらない」ことだと考えます。時間を区切って一気に全容をつかみ、定着のために実際の文章に触れながらチェックを繰り返し、定着を図る、という形式をお勧めしています。文法学習のみコツコツやっていたのでは、細か過ぎたり、無味乾燥なつまらない学習に陥ってしまったりします。早めに全容をざっくりと把握し、実際の文章に触れ、現段階で何が足りないか、何をすればよいかをチェックしながら学習を進めたいものです。

- まず読んでみる→よくわからなくて困る→あきらめてしまうのをグッとこらえる！
→何を参照すればよいか、何を調べれば解決するか、過去の学習を踏まえメドを立ててみる
→確認して、メド通りだったか、違った場合原因はどこだったのかチェックしておく
→反復する中で定着する

幼児に対していきなり補助輪無しで自転車に乗るのを強要するような乱暴な提案に見えるかもしれませんが、未知の文章を読む上での心構えも養成でき、受験問題に対するときにも役立つと考えます。

「後の問いに答えなさい」

つまり正確な解答能力です。

問いに答えなくてもよいという出題は当然ながらあり得ません。必ず、求められていることに答えなければなりません。実際にテストにおいて国語ができるということの核心部分はこちらです。「次の文章を読み」に対応する部分では、与えられた文字情報（つまり文章）を正確につかむこと、つまり、文章の「執筆者との対話」が求められています。しかし、この答える段階で求められるのは「作問者との対話」、そして「採点者との対話」です。作問者が何を求めているかは当然ながら、問題文の指示を正確に読めばわかるのです。そこから作問者が示したサインを見抜くことも大切です。たとえば文章中の傍線部について「どういうことか」と聞かれていたらそれは単なる傍線部の解釈でしょう。情報処理的に本文の適切な箇所をチェックしたうえで傍線部を分析的に解釈、換言していけばいいこととなります。しかし「どういうことと考えられる

か」と表現してあったら、「本文にそのまま答えとなる内容は書いていないですよ」と伝えたいのだ、と考えるべきでしょう。良問では高精度でメッセージが示されているものです。見落とさないようにして取り組みましょう。

設問にあたる時常に意識したいことは

- ①設問趣旨を的確につかむ。
 - *問題指示を理解する。
 - *本文から手がかりを十分に拾う。
- ②記述問題のためにも表現力を充実させる。

特に、設問趣旨を把握し、手がかりを拾うプロセスを重視したいものです。「次の文章を読み後の問いに答えなさい」と書いてあるのだから、文章中から手がかりが見つからないことはあり得ないのだと考えて取り組みましょう。

ここまで意識していただきたいことを提案してきましたが、実際には苦勞している方が多いのも事実です。そのような個々の現状を把握して具体的なアドバイスを、授業内、さらに答案の添削等でできればと思っています。

2. 受講効果を上げるために

まず、受講の前段階についてのご提案です。国語という教科を愛する一担当者としての独り言のようなもので恐縮ですが、グノーブルの国語受講を考えていない方、また、特に中学生の方にも申し上げたいと思います。受験には直結しないかも知れませんが「国語に親しむ」ことをお勧めします。具体的にいうとやはり「読書」です。元プロ野球監督の野村克也氏の名言として、

「読書は博学なる人をつくり、会話は機敏なる人をつくり、筆記は確実なる人をつくる」

という言葉があるそうですが、全ての前提に、インプット量、さらに考察習慣の蓄積が必要となります。

余談ですが、太宰治などは、その内容に共感しうる「適切な」年齢があると思います。社会人になって初めて読むのではあまり価値がない気もします。逆に中学生のころにつまらなく感じた「高瀬舟」（森鷗外）や「故郷」（魯迅）を大人になって改めて読み、そのおもしろさに感動したという経験が自分にはあります。各自にとって「その年齢でなければ価値がない」というタイミングがあるようです。これは重要な、かけがえのない体験だと思います。

近年、スマートフォンも普及し、手軽に情報や娯楽が手に入るようになりました。かつてのように、持て余してしまった時間を名作の読書に費やすような生徒は少なくなりました。じっくりと腰を据えて長めの文章を読むことは少なくなっていく傾向にあります。老婆心ながら、時間を忘れて本に読みふけるというのは生徒や学生の間にもみ許された貴重な経験だということを伝えられたらと考えています。

深い部分まで読み解けなくても、リズム感や語彙に親しんでもらいたいと思います。日本語による文学特有のリズム感を、名作を通して体になじませておくことは、受験勉強を超えた教養として将来の財産になると思います。点数に直結すること以外の知の楽しみを享受できることが、中学生、高一生の幸福だと考えます。

①授業内で

▼古文の授業（高1もしくは高2で開講）の流れ

前回の全訳演習プリント、返却と解説①⇒ 古文単語学習②⇒ 宿題の解説③⇒ お帰り全訳演習④

*過去扱った内容を定着度確認のためそのまま出題する「復習問題」、「復習テスト」も実施。

・前回の「全訳演習」（プリント）、返却と解説①

得点をつけて返却します。解説では原則として黒板に全文を書き出し、ポイント部分を全て色分けして（単語は黄色、助動詞は赤色、敬語は青色など全て事前に案内したルールで色を用います）、一語一語を疎かにしない緻密な解釈を提案します。他の文章でも役に立つ、古文の背景知識も楽しくお伝えしていきます。また、ただ講師が解説するだけではなく、どうすれば正しい解釈になったかを各自に考えてもらうように「説明し尽くさず」、どこにポイントがあると思うか考えてもらいつつ解説を加えていきます、約45分～60分くらいかけます。

・古文単語学習②

「古文単語帳」を使用し、毎週7つずつをメドに解説していきます。どういう漢字をあてるか、どういう語源イメージが存在するかを解説し、丸覚えにならないように工夫しています。また、今まで読んだ文章のどこで出てきたかを聞く機会が後になるにつれて増えていきます。学習効果を実感してもらいたい部分です。

・宿題の解説③

基本的には15分程度で終わらせる程度の全訳が宿題です。授業ではやっているかをチェックするだけの内容にならないようにしています。古文は、どこかで調べれば宿題をやった体裁が整ってしまうことが考えられます。また解決法として辞書を引くことも重要ですが、調べると該当部分がそのまま出ていることもあるでしょう。それを「ラッキー」ととらえるか、意味がないと考えるかが重要です。原則として辞書は用いずに取り組み、最後の最後で取り組む中で考えた自分のメドは正しかったか確認する程度にとどめるべきです。授業ではそのような姿勢を育むためにも「どこがよく分からなかったか」、「分からない理由は何だと思ったか」を聞き、確認しながら解説するようにしています。

・全訳演習④

約15分程度です。納得いくまで取り組んでもらい、提出してもらって授業は終了です。前期は助動詞活用表や過去のノートの参照も許容します。どうすれば解決するか考えながら取り組む姿勢を確立してほしいと思っています。同時に、機械的で、応用のきかない形で暗記をするのではなく、実際に使いこなす中で古典文法をマスターしてほしいと考えています。答案の提出時、「どうしてこんなにできないのだろう」と悩み落ち込む体験も重要だと思います。

▼毎回出席する重要性

授業は常に継続性を重視し、過去のどの内容と関連するか聞き続けることになります。よって欠席などで空白部分があると、疎外感を感じるようになってしまいます。出席し続けてください。なお、几帳面な性格の方は、やむを得ない空白部分（欠席）が気になるでしょう。ただ、数回重なってしまうと、抜けた内容が不安で足が重くもなるでしょう。休んだ部分のプリントなどを提出することなども重要な姿勢だと思いますが、できなくても「これ以上空白を作らない」という姿勢で改めて出席し続けましょう。授業は反復の連続です。人にとって2回目が自分にとって1

回目となってしまっても、その後、人にとって11回目となる時は、10回目となるわけで、致命的な差とはならないと前向きに考えましょう。ただし、春期講習、夏期講習など空白となると授業効果が皆無に等しくなる授業もありますので、出席の大切さは、もちろんいうまでもありません。

②授業外で

▼宿題と復習

既に提案したように、宿題はただやればよいという姿勢ではなく、次の授業への問題意識を持つために取り組んでください。

また、一番重要なのは3分程度の復習です。授業内で、プリントの整理の仕方も受講生には提案しますが、整理しつつその時「何も書いてないプリント」を眺めるだけで十分です（1回音読すればさらによいと思いますが）。眺める中で、授業で自分が分かっていたこと、分かっていたなかったこと、さらに当てられて答えられたところなど、授業を思い出す機会にします。そして、「あれっ、この部分は何だったっけ」と感じたら、書き込み入りのプリントの方を見れば解決します。この積み重ねがいかに重要か進めば進むほど気づくこととなります。また、授業で配付する授業定着プリントの実施、長期休みなどの訳し直しも自主的に取り組んで欲しいと思います。

3. 大学入試のイメージ

将来の大学受験では、どういうことが求められているかを簡単に解説します。

なお、どの局面でも共通することは、「行間を読む読解力」「深い考察力」「豊かな語彙力」を駆使しすぎることは危険だということです。本当に国語力のある方は、ある意味、受験国語の「浅さ」を理解しあきらめているものです。ただ、「浅い」と表現しましたが、正確に文章を理解し、正確に相手（採点者）が求めているものを想定し、正確に伝達することは、より深い考察、展開の大前提となります。受験国語は、実は、将来大学で高度な研究活動に進めるための大前提たる客観的読解力を身に付けているかを試す機会なのではないでしょうか。

授業でも繰り返し提示する内容ですが、

- ・ **「作問者の意図」を見抜く**
- ・ **「採点者の想定」を見抜く**

以上2点が特に重要だと考えます。

▼例題によるイメージ作り

実際の受験問題で簡単に解説します。将来の受験ではどのようなことが求められるのかイメージしてください。なお、東大の問題とセンター試験（共通テストの前身）を題材にします。実際に部分的抜粋では全ては伝わらないでしょうが、イメージすることが重要なのでご了承ください。なお、今回は例を示しませんが、早稲田、上智などの私大の問題は、知っていれば正解を得られる知識問題（しかもかなり難しいものが目立つ）、こまかな古典文法問題が多いことを一言示しておきます。

東大2011年の現代文より

豊かさの内容が固定化された概念によって捉えられると、その概念によって空間の再編が行われる。たとえば「親

水護岸」は水に親しむという行為を可能にするように再編された空間であるから、空間を豊かにすることであるように思われるが、その空間は「水辺に下りる」「水辺を歩く」というコンセプトを実現する空間にすぎない。そこでひとは、たしかに水辺に下りること、水辺を歩くことはできるが、それ以外のことをする可能性は排除されてしまう。この排除は川という本来自然のものが概念という人工のものによって置換されるということを意味している。それは本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態と捉えることができる。

問「本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態」とはどういうことか、説明せよ。

*対応法のイメージ

「とにかく語り尽くそう」と考えないことです。東大は字数制限のある問題はほぼありませんが、解答欄のスペースでおおまかな字数を指定してあります。その中に「採点者の想定」を考えつつ書きます。「はめ込んでいく」という発想のほうがよいかもしれません。この問題は「身体空間」と「概念空間」の適切な解釈が中心ですので、「本来……であるものが……によって置き換えられている事態ということ」という解答構成が原則になります。あとは、「……」の部分の適切にまとめきればよいのです。東大は特にこのような「採点者の想定」が見抜きやすい問題が目立ちます。その枠組みにあわせてまとめるのが「どういうことか」という換言問題の「作問者の意図」であると考えましょう。ここに、類まれなる言語能力やセンスは一切不要です。

次に古典問題について示します。

東大2007年の古文より

堀河天皇「さること侍りき。ただのことにはあらず。笛に秘曲を伝へて、その曲を千遍吹きし時、為隆参りてことを奏しき。今二、三遍になりたれば、吹き果てて言はんと思ひしほどに、尋ねしかば、まかり出でにき。それをさ申しける、いとほづかしきことなり」

問「尋ねしかば、まかり出でにき」を、だれの行為かがわかるように、ことばを補って現代語訳せよ。

*対応法のイメージ

典型的な東大古典の設問です。単なる単語知識でなく適切に情報処理して（ことばを補って）、相手に伝えきれるかどうかを試しています。他を見ている、「誰の、誰に対する、どのような気持ちであるかを述べよ」のようにそもそもの解答条件を指示する問題も目立ちます。

さて、この部分、傍線部自体のみ訳すと「探したところ、退出してしまった」となります。「尋ね」が尋ねるではなく探すという意味であることや、「……しかば」の訳し方（この文脈では、理由の「ので」では意味が通らないことにも気付く）、さらに文末「……にき」という助動詞（完了「ぬ」・過去「き」）の訳出も必要でしょうが、傍線部の内容を誤解なく伝えるには、「誰が誰を探したか」「誰がまかり出でたか」を補って示すべきで、そこそそが採点の中心だと理解できると思います。

なお、この部分は登場人物の会話部分となっている部分です。そこで、冒頭の訳で主語を「私が」とすべきですが、固有名詞ではないので、「この生徒は主語が誰か分かっていないのではないか」と誤解を与えるおそれがあります。しかし、「堀河天皇は」と話者を示して書くのも、一人称が自分の名前であるようで、不自然です。そこで、それらを併せて「わたくし、堀河天皇が……」と示します。主語を把握した後で見ると、「退出する」は自敬表現になっておさまりが悪いので、「出て行く」にします。さらに、天皇が探したところ出て行く、というのは失礼だと気付き、「出て行ってしまっていた」と時制を調節することができれば完璧です。そんな工夫された答案が、長い期間受講して下さっている生徒さんの答案では見られました。

次に、共通テストの特徴を示すためにセンター試験の古文文法問題を2題示します。

センター試験2012年の古文・文法問題より

- a 「…我よくこととり申さん」と、うけがはれたるに、うれしきことたとへんものなし。…
- b 先の宮人、この人の二なき志をめで給ひて、琴を送られしが、絃一筋ある琴なりき。…
- c 二筋に落つる涙も一筋の玉の小琴にかけにけるかも…
- d その形面白かりければ、くしげの箱なる元結を一筋ひきかけて、調べ給へるよりはじまりて、…

問 波線部 a～d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① a 受身の助動詞 b 断定の助動詞 c 完了の助動詞 d 動詞の活用語尾
- ② a 尊敬の助動詞 b 伝聞の助動詞 c 格助詞 d 動詞の活用語尾
- ③ a 受身の助動詞 b 伝聞の助動詞 c 断定の助動詞 d 完了の助動詞
- ④ a 尊敬の助動詞 b 断定の助動詞 c 格助詞 d 動詞の活用語尾
- ⑤ a 尊敬の助動詞 b 断定の助動詞 c 完了の助動詞 d 完了の助動詞

*対応法のイメージ

まずマーク式を中心とする共通テストとは、特に客観的情報処理に特化した試験です。他の入試にもまして、時間をかけて深く考察することは決して求められていない試験であることを理解しておきましょう。全体としても「読む量」が多く、じっくり読んでいる時間はありません。そこに「作問者の意図」を読み取るべきです。つまり、「数段落後などの遠くの手がかりが必要な場合はほとんどない。傍線部と、その直前直後のみを手がかりに『作業的に』答えを出せるように作られている」ことを知っておきましょう。

そして、量が多いということは「読むスピードを上げる」か「読む量を減らす」のいずれかとなります。前者には長期的蓄積が必要です。後者のヒントを1つお知らせすると、選択肢は原則、各選択肢が同じ構成で作られています。まず、前半のみを読み、そこで半分以下に絞り、その選択肢のみ後半を読むことを想定して作問されています。実際、前半部分のみで決まる問題もかなりの数にのぼるのが現実です。ここで示した文法問題でも、自分にとって確実と思えるものから攻めればいいのです。例えば2012年は、Cが「完了」を表すと分かれば、早々に2択になります。全てが完璧に分からなくても、いくつか分かれば解決するように作られているのです。

小説や、古文で言葉の意味を聞く問題があるのですが、この場合も、深く考えるのではなく辞書的意味を原則に作業的に解いて正解を得られる場合が目立つということを知っておきましょう。

4. 今後について

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- ・東大……………理系でも文系と同レベルの実力が二次試験まで必要
- ・東工大……………二次試験、国語無し。共通テストでは受験するが、共通テストの重要性が著しく低い
- ・国立医学部……二次試験に国語があるところは東大・京大・名古屋大・山形大のみだが、共通テストで高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのように必要であるかを調べるのが相当に重要です。(特に古文・漢文などは、大学入学後に使用する生徒も少ないため、受験形態に応じた効率的な対策が望ましいでしょう。)

こうした入試制度に鑑み、グノーブル国語科では、国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

中3 冬期講習・・・古文入門

※高1以降の古文受講を前に、長文読解を中心とするグノーブル古文を体感していただける2日間完結講座

中3Fターム(1月・2月)

特別講座・・・・・・現代文入門

※実際の入試問題を用いて、大学受験の情報処理の国語を練習していただく6回完結講座

高1・・・・・・古文 [春期講習からの通年講座、1年間で文法から入試演習まで行い、完結]

高2・・・・・・現代文 [春～12月] (文系、東大・京大志望の理系)

古文 (高1で未履修の者) [春期からの通年講座、1年間 (もしくは春～12月) 完結]

※高1・高2の夏期講習と冬期講習に「漢文」開講

※高1・新高3 (高2) の冬期講習に「小論文 Basic」開講

※新高3 (高2) の1～2月に「古文Fターム特別講座」(高1・2で未履修の者向け) 開講

高3・・・・・・志望校別の対策 [春期講習から直前講習で完結]

東大国語、難関国語、私大国語、小論文 (医学部小論文)

※夏期講習と冬期講習に「センター国語」開講

古文は、高1でも高2でも受講していただけますが、学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。高2と合同のため、高1でついていけないのか不安だという方もいますが、春期講習で1から文法をはじめ、毎週演習を重ねることで、年度末の1月2月には東大などの過去問にも取り組める力がつきます。



(参考) 0nable古文の主教材 お帰りの全訳演習

いずれにせよ、高3になって慌てて古文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる場合は、高2までに古文 (と漢文) の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。

5. 新入試への取り組み

①現行のセンター試験からの変更点

新しい「大学入学共通テスト」では、国語では記述式試験が導入されます。また、マーク式の部分にも出題方針の変更があります。

現行 (80 分)	新テスト (計 100 分)	
マークシート形式 ①評論 ②小説 ③古文 ④漢文	マークシート形式 ①評論 ②文学 (及び、その鑑賞文) ③古文 (及び、関連する現代文) ④漢文 (及び、関連する現代文)	記述形式 実社会との関連の深い文章を読み、的確にその内容を整理・要約して書く。3~4 題程度。

【共通テスト 記述式について】

記述式には、従来出題されていたような評論文・小説文とは違い、以下のようなジャンルの文章が出題される予定です。

- ・論理的な内容を題材にした説明、論説等
- ・新聞記事・社説、会議等の記録、実務的な文章（取扱説明書、報告書、提案書等）、契約書や法令の条文、公文書等
- ・統計資料（図表・グラフ等）を用いた説明等

こうした文章は、慣れさえすれば、それほど難しいものではありません。しかし、ある程度の慣れは必要です（英語の TOEIC 等で出題されている、実用的な文章と近いイメージを持てば良いでしょう）。

記述に関しては、独創的な考えや深く掘り下げた考察を求めるものではなく、

- ・与えられた情報を適切に整理して要約する
- ・課題文と問題指示の条件下で、論理的に妥当な結論を導いて書く

というものです。中学受験時、公立中高一貫の対策をされていれば、適性検査の表・グラフ読解の問題に近いものを想像していただければ良いでしょう。

記述字数は数十字程度の短いものと 150~200 字程度のものがあります。サンプル問題を見る限り、字数の多い問題も、与えられた条件を満たそうとするうちに、すぐ規定字数になります。「長くて埋まらない」といった感覚はないはずです。

国公立の二次試験の国語の対策をしている生徒にとっては、易しく感じられるかと思えます。ただし、理系で二次試験に国語がない生徒、選択問題のみの私立大を志望する生徒の中には、問題形式が記述式だというだけで、はじめから諦めてしまうような人がいます。そうした姿勢にならないよう、早い段階から、自分で考えて書く習慣を付けましょう。

【共通テスト マーク式の出題方針変化】

現在は、評論・小説・古文・漢文いずれも、一つの文章が提示され、それに関する語彙、文法、読解の問題が出されています。しかし、共通テストでは、

- ・複数のテキストや資料を提示し、必要な情報を組み合わせ思考・判断させる
- ・分野の異なる複数の文章の深い内容を比較検討させる

などの方針が示されています。現在サンプル問題が公開されていますが、古文では、『平家物語』の古文と、それを解説した現代文とを組み合わせた出題がなされている例があります。

読解問題に関しては、線の引かれた部分の品詞分解さえすれば解答できるようなものではな

く、与えられている複数の課題文の文脈を読み解いた上で答えなくてはなりません。試験時間はかなり限られています、古文だろうが漢文だろうが、初見の文章の内容を時間内で消化できなくてはならないのです。

現在、早稲田大学の文化構想学部で現・古・漢融合という、少し近い形式の試験が行われていますが、個々の設問自体は簡単であるものの、その融合という形式や、読解しなくてはいけない文章の量に面食らう受験生が多くいます。新・共通テストでも、同じように苦手意識を持つ生徒が出るのが予想されます。

【共通テスト 全体の変化】

国語のセンター試験は、他教科と比べても、時間の制限が厳しく、上位生の中でも解き終わらないという生徒がいます。その厳しさはあっという間に増すものと考えられます。100分に試験時間が増えるとはいえ、大問の中で複数の文章を読む困難、記述式を要領良く終わらせる困難があります。

また現在、文系の中堅私立大学、あるいは理系の私立大学のセンター利用入試において、「現代文のみ」あるいは「現代文と古文のみ」で解答した試験結果を判定してくれる大学があります。そのような大学しか受けない場合、「80分間で現代文のみ（あるいは現代文と古文のみ）を、時間をかけて解答する」という戦術がありました。しかし、共通テスト移行後は、一括して「国語」という形での成績提供が予定されています。どのような受験生も、限られた試験時間の中に大量の文章を読めなくてはならないということになるわけです。

②Gnoble での取り組み

- ・中学3年生Fタームで、現代文を開講します。新テストの記述式対策とともに、これまでの学習で国語を苦手と感じる生徒に早めに大学受験現代文への取り組み方を示します。
- ・従来から行っていることですが、古文の授業では、早めに文法のドリル的学習を卒業し、長文を自力で読みこなすということに重点を置いて進めます。毎週、授業の場で、全訳答案を書き上げてもらうことで、思考力・表現力を醸成するとともに、深い理解を促します。
- ・高校3年生では、授業内に共通テストのマーク式対策を行います。また、提出課題として共通テストの記述式と同形式の問題を毎月配付します（提出者には添削します）。

③自主的に取り組んでもらいたいこと

大学入試改革は、単にセンター試験が大学入学共通テストに切り替わるというだけでなく、高大接続のあり方、そして中学・高校の教育内容のあり方を改革していこうという大きな運動です。その変化の中で、いわゆる「AO入試」「推薦入試」（今後、総合型選抜・学校推薦型選抜などと名称変更の予定）の改革も進められています。

一つには、こうした入試においても、大学入学共通テスト、何かしらの学科試験などで、基礎学力の評価をしなければならない、という要請があります。もう一つには、これまでも進んできた、「AO入試」「推薦入試」型の定員を増やしていこうという流れが、難関大学でも一層加速していくことが見込まれます。

2015年、早稲田大学がその当時4割程度であった推薦・AOでの入学者を6割まで引き上げるという方針を発表し、注目を集めました。実際に、「地域貢献型人材発掘入試」などが導入され、推薦・AO枠の増員（＝一般定員の削減）が進められています。2016年度には、東京大学で「推薦入試」、京都大学で「特色入試」が始まりました。これらはいずれも、高校時点で積極的に学問に励み、大学での学びに関しても主体的に設計のできている生徒を採ろうとする選抜制度です。

こうした流れの中で、「AO・推薦などの入試を受けたいので、志望理由書や提出課題を見て

欲しい」と、国語科の職員に相談に訪れる生徒がいます。そのこと自体は、私たちも大歓迎なのですが、

「法学部を受けたいのですが、そもそも法学部って何をやる場所ですか」

「特に将来やりたいことがないので、志望理由として書くことがありません」という状態で相談に来る生徒がいて、驚いてしまうことがあります。

AO・推薦入試は、単に入試機会が増えるという発想だけで、簡単に受験できるものではありません。志望動機や将来の希望、専攻分野に関する問題意識などを語れなくてはなりません。もし特に興味のある分野などが定まっていなければ、一般入試、あるいは推薦入試の中の「指定校推薦」（学校の成績をもとに、校内選抜で決まる）という制度を利用してもらいたいと思います。

AO・推薦入試を考えている人は、中学生や高校1～2年生のうちに、関心のある分野について調べたり、本を読んだり、その仕事に従事する人の話を聞いたりして、興味を深めてもらえば、と思います。その分野で、中学・高校生向けに開かれているコンテストやイベントなどに参加するのも良いでしょう。

（参考）グノーブル生がよく受けるAO推薦入試の例

▼慶応義塾大学法学部 FIT入試A方式

書類選考：志望理由2, 000字に加え、「あなたがいかに魅力的な人物か」を実績証明の書類とともに提出する

2次選考：①教員の講義の後に論述式の試験を実施

②2分間の自己アピールの後に、6～7名で45分間の討論

▼筑波大学医学群医学類 推薦入試

出願要件：調査書が概評A（5段階で4.3以上）もしくは英語、理数系に卓越した能力を持つ者、国際交流の活動経験のある者

※4技能の英語試験 C1スコア以上は加点

選考：学力試験（英・数・理）、個人面接、適応力などを見る適性検査